# 遊学俳句

吉谷夏洞選

## 優秀

秋鯖の目に海色の深く澄む
大西　敏子(平野)

(評) 鯖の季題は五月だが秋にとれる鯖を秋鯖といって貴重がられます。作者はその新鮮さを魚の目に深い海の色の美しさを捕えています。

割箸の歪(いびつ)に割れし走りそば
大谷　一正(藤山)

(評) 信州はそばの名産地で九月、十月にはそばのはしりが刈られ、そのそばを手打ちにして食べます。作者は淡白で美味のそばを割箸で割って食べるのですが箸がゆがんで割れた出来事をうまく詠っています。

炊事の手休めては聞く虫の声
厨子　トミ子(上中)

強風に音のはずれし法師蟬
田中　舒子(北今市)

千年の楠の茂りや太子道
清水　美弥子(関屋北)

春風やみどり色濃き古代食
矢野　達生(関屋北)

届く荷の重さ抱き取る今年米
高谷　康子(西真美)

石琴の縄文の音や春隣
平居　澪子(真美ヶ丘)

癌とりし人爽やかに死生観
黒川　静雄(上中)

初鴨の胸で水押し並びたり
森岡　節子(西真美)

焦げつきし鍋磨きけり妻は風邪
松田　奈良一(関屋北)

真実は言えず落葉の道戻る
奥村　成子(関屋北)

バラバラにされてマネキン更衣
近倉　利子(関屋北)

三山をシルエットにす霧の海
浜口　福子(関屋北)

山茶花の初花淡く咲きにけり
花瀬　タツノ(磯壁)

鈴の音に年改まる伽藍かな
川瀬　清津矢(下田西)

笹の香や新茶のかおり笹だんご
中沢宣誠(関屋北)

去年の巣にツバメ戻りて夏来たる
山本　トミ子(五位堂)

(総評)

投句全体に個性のにじむ力作が多く見られました。

此度、遊学の企画により、俳句欄を設けられたことは俳句向上に道を開かれたことで敬意を表すと共に、益々俳句作句に対する理解と向上を希望するものであります。

当香芝市は郷土として美しい二上山を背景に、且つ歴史的な環境に恵まれていて人に知られた土地柄で、郷土文学としての俳句を育て抱擁する母体が調っております。俳人の野田別天楼は、いちはやく俳句と郷土文学の大切なことを説かれました。今後、自然環境に恵まれた香芝より、よい俳句及びよい俳人の生れ出ることを希望するものであります。私の出身地は下田で、今も郷土への愛着にかられること人より以上であります。

佐保姫の裳裾にからむ
二子かな

山笑う大津皇子の墓所